

末黒野

すぐろの



2月号
(通巻894号)

風樹

森清堯

真青なる天転がして芋の露
遠見より目先の疎ら秋桜
梨を剥く妻に上手とはやされて
翳雲小さき夢の数しれず
学習田一間の稲架組まれけり
名苑のひときは高き紫苑かな
ひとり居の否応なき日小鳥来る
頬杖のペンを持ちたる秋思かな
林泉の径のつづらやつづれさせ
行く秋の光をはじく風樹かな
木の実落つ思ひの丈をほどきつつ
海桐の実湾の海光あまねきて

瑞声

夜長の灯

黒滝志麻子
(顧問)

山肌のしめり抱けり沢桔梗
水に触れ水に映りて秋茜
露草を分け入り朝の測量士
一つづつ消して一つを夜長の灯
門灯を消してちちろに帰す闇
穂薄の解け光の放たれぬ
母よりも子の影長き十三夜
夜の更くる音の深さや末の秋

甲矢集

配列は音順（月毎の循環）



波郷忌

田中臥石

採れたての牡蠣買ふ網の潮寒
牡蠣焼きてをり一献を妻とかな
牡蠣食べてをり外房の簾越し
ふるさとの香り懐かしラフランス
波郷忌を迎へ花屋に寄りにけり
波郷忌を修すころへ海の音
年取つて夫婦相和す日向ぼこ
妻が居て子が居て孫や山眠る
あえかなる冬薔薇の朱や誕生日
籠りゐてきのふよりけふ寒きかな

雁の棹

森清信子

小鳥来る木霊の宿る楸の瘤
爽涼の引き緊むる岳空真青
風音の囀す山裾蕎麦の花
鰯雲空にさざ波立つごとく
海燃やし海を残しぬ秋落暉
山の端の残る日集め百目柿
秋冷を踏みて港の石畳
振り向かぬ男の背中十三夜
秋風を入れて讚美歌湧きにけり
関節をなだむる朝そぞろ寒

鶉高音

石黒興兵

神御座す山の泛びぬ稲光
文机のペーパーナイフ月明り
ありふれたる壺に野の花似合ひけり
一本は故郷の方へ花野徑
白檜の枝張り広し秋の声
篋に入れば木洩れ日鶉高音
難聴につのる孤独や流れ星
秋深し舗道へ洩るる古書肆の灯
軽トラの出入り牛舎の冬支度
疫病禍の三波の報の寒さかな

萩の戸

岡野里子

萩の戸の雨の鎌倉小路かな
初鴨やさ揺らぐ池の舫ひ舟
色変へぬ松や築地の五条線
篠垣や木犀金を敷つめて
晩鐘の律の調べや広重忌
金木犀庫裏の格子の拭き込まれ
雨少し風の少しや残る虫
長き夜や耳を領する秒針音
町川の軋む朽ち舟十三夜
綾なせる散らし模様や山紅葉

稲架襖

菅野日出子

小鳥来る園の要の濁り池
松手入れなじみの庭師孫つれて
産土のきざはしを染め散る銀杏
供花に寄る秋蝶しばし羽根たたみ
道の駅すぎて裾野の稲架襖
星流る廻るともなき観覧車
釜替へて炊き上り待つ今年米
又一人生徒の訃報忍草
鉦叩箆筥に今も鯨尺
朝顔の終の一輪淡き紺

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



紅葉の葉

大川暉美

秋晴の隅ひとはけの雲引きて
秋高し羽織るジレーに若返り
笥の水零るる先や草紅葉
魯田や穂先へ青き風生れ
名刹の名鐘照らす後の月
師の終の句誌へ紅葉を葉とす
釣瓶落し甲斐連山の影絵めき

時雨忌

太田良一

どんぐりの転ぶ湯島や女坂
素泊りの宿の湯船や十三夜
急く旅のリュックへ釣瓶落しかな
寡黙なる湯治の客や山装ふ
龍の絵の天井せまき小春かな
時雨忌や夕日を流す桂川
塗椀や明り障子の一の膳

枕

上

岡田史女

丘陵は景観遺構草の花
抜け道の真緒の芒垂直に
雁や酒倉二百有余年
晩秋や夜の風音を枕上
晶々と初冠雪の芙蓉峰
冬隣樹皮に潜みしもの数多
小春日の光たゆたふ水面かな

着 火

小田嶋野笛

長き夜やハートの王の片まなこ
恙無く三九日の茄子煮浸しに
くりくりと子猿の眼木の実降る
瓜坊の後ろ姿や過疎の村
渾身の夕日の着火山紅葉
泣くごとく母呼ぶごとく瓢の笛
残さるるもののの呟き種瓢

桜紅葉

加藤静江

日蓮の説法跡や冷まじき
名利の閑寂深し萩の雨
桜紅葉の高さ揃へり段葛
紅葉には一旬早し唐楓
白萩を隙なく咲かす古刹かな
伽藍よりこぼるる雀秋高し
深々と稔りつくしぬ稲の秋

深 秋

斉藤マキ珈琲

秋高し郵便受に旅の本
菊の香や吾が今生にあまたの師
天翔る神話の馬や星月夜
いにしへは海なりし町霧襖
深秋やスケッチに人ひとり足し
秋深し風沁みやすき指の傷
大泣きの花かんざしや七五三

冬 薄

堺 昌子

装へる山や平和の鐘を撞く
途切れては続く魯田群れ鴉
山辺の道のはるけし秋惜しみ
境内の野外能跡冬薄
人声に見紛ふ声や冬日濃し
夕日影しばしとどめぬ木守柿
風を読みいづくまで飛び冬の風

秋 の 暮

高木邦雄

放牧の牛呼ぶ声や秋の暮
秋水を滑る渡舟の足速し
長き夜やカミュのペストを斜め読み
初鳴の群れて池面の波の綾
異邦人眠る墓石や祈り虫
秋深し春日大社の婚の笛
立冬の雲曳く機影幽かなる

落 葉

今村千年

夕暮の鐘の響きや秋深み
秋深む鯉の色付き進みけり
見渡せば紅葉の溪と山幾重
ゴンドラの揺れて紅葉の山も揺れ
ふる里を訪へば落葉の時雨径
佇めば落葉時雨のなかにをり
捨て舟の繋ぎの緩ぶ小春かな

雁 渡 る

長尾タイ

寂寞とそそぐ月光西行碑
釣舟の揺蕩ふ静寂雁渡る
金風に晒す詩心指折りぬ
石つぶて百羽飛び立つ稲雀
稲束を掛くる老翁マイペース
村上げて持ち寄りといふ菊花展
コスモスの迷路の彩に溺れけり



青炎集

森清 堯選



横浜 梅田 武

大網白里 岡井マスミ

名月に逆らふものなかりけり

一合を妻と酌み交ふ月今宵

地を染めて名残の薫り金木犀

天仰ぐ敗戦投手いわし雲

温め酒確と温めて五十年

歳時記は永久のバイブル文9化の日

横浜 松浦 哲夫

横浜 鍋島 武彦

孫の背の伸びしと便り竹の春

日に染まる端山遠山秋高し

草の原小さき秋を埋めつくし

行く秋や上ル下ルと京の旅

車窓から白き山波秋深む

濡れ縁に雲影移り十三夜

ふるざとは捨田捨畑曼珠沙華
また一つ消ゆる窓の灯今日の月
富士の影ひときは明か秋夕焼
柿もぐや路地の男の助けえて
新走り染むる地の味人の味
香ばしき煙懐かし落葉焚

川崎 滋野 暁

平塚 尾崎 千代一

海めける釣船草の山路かな

箱詰へ朱き葉添へぬ黒葡萄

莢逐の実の鈴生りや杜の道

口遊む唱歌はもみぢ野ばらの実

浅はかを許されてをり後の月

待合せのベンチや黄葉降り止まず

横浜 木下 晃

横浜 山崎 稔子

一匹に広き空あり赤とんぼ

日常のなき日常や障子貼る

夕映えの庭のコキアの紅葉かな

忘れ物さはの外出冬に入る

みなぎりたる余緑の余命萩枯れて

世話になるステロイド剤今朝の冬

横浜 渡辺 美智子

横浜 池乘 恵美子

万屋や秋果の横のまねき猫

満月や二礼二拍手深深と

有り無し風の風に寄り添ひ貴船菊

外灯の一基点らず秋の暮

幽かなる昨夜の秋思を持て余す

文机の片つけ少し秋深む

朝まだき襟掻き寄せぬそぞろ寒
白壁に燃ゆるアトや葛紅葉
八重雨に色を極めり実紫
街道の銀杏黄葉や一直線
棚雲をこぼるる日ざし青蜜柑
秋寒や水道水の手を柔し

暮れ残る湖の蒼さや桐一葉
譲られて座る笑顔や秋日和
花すべて風に従ふ花野かな
名月やかつて栄えし宿場町
疫病禍の故郷は遠し秋霰雨
紅葉づるやこと上枝を輝かせ

耕 土 集

岡野 里子



コスモスを描くや十色の筆揃へ
稲架かけの棚田や光る海ひらけ
ホスピスの友を癒すや尉鷄
空真青摘むコスモスのひと抱へ
富士はるか足下の石路の黄を極め

横浜 平野 秀子

源義の絶句や窓の後の月
花木権質屋の蔵の古き壁
水引きの花はミクロや虫めがね
青天へ伸ばす梯子や松手入れ
秋晴や己が影踏みバス待てり

横浜 小原 紀子

シャインマスカット糖度表示の悩ましき
名月のあまねく照らし谷戸の家
門くぐり萩の迎へる文学館
店先に品定めして裂き膾
槌音の抜けて空澄む日和かな

横浜 村田 敦子

木枯の雨戸を叩く夜明かな
鴨の群れ潮満ちくれば数を増し
岩を食む冬の怒涛や磯馴松
寒空に鳶の旋回漁師町
見渡すや甲斐の峰々冬景色

横浜 鈴木 英雄

長き夜や子に音読をすすめられ
りんだうを妻の祥月命日に
戸も窓も開けて会合そぞろ寒
秋深し眼鏡補聴器身ほとりに
秋寂ぶや放歌高吟夢の夢

横浜 杉山 善信

三度来る感染の波冬隣
ちんどん屋ついで行きたき秋の暮
小春日や縁先埋まるシャツの旗
背を丸め長き柄を持って落葉掃く
生徒無き大学の門落葉飛ぶ

川崎 木村 純子

新米やすすむ二人の象牙箸
戸を叩く風雨の音や冬隣
匂ひけり母の自慢の栗おこは
小春日を使ひ切らむとてんてこまひ
人知れず黄を深めたり石路の花

横浜 小池 桃代

冬隣垣に列なす雀らよ
雨上り光る松葉や文化の日
秋の風小川に沿うて夕散歩
冬蝶やあしたの雲へゆるゆると
冬蜂の群るる皇帝ダリアかな

横浜 白居 澄子

狛犬の口から手水菊日和
富士一望杜の高きに登り来て
鶏頭や傾ぎて指せる道標
城跡を下る山道石路の花
境内に手締め響くや酉の市

川崎 小林 廣志

冬牡丹明日を待つかに菰の中
凜凜と張れる空気や冬の暁
積ん読の本と居眠る炬燵かな
酉の市どころも小声の手締めかな
茶の花や午後の茶席の菓子甘し

横浜 久島しんの

秋の暮何か忘れてゐるやうな
築山の芒一叢まつたりと
手のひらに握る酢橘や香を受けて
色変へぬ松や寺領の竹囲ひ
単線の一両列車草紅葉

横浜 小林 拓路

檜皮屋の軒先掠め月登る
自転車を引きて吊橋雁渡し
菊の日の女子高生の手前かな
読み直すヒロシマノート秋灯下
千年の小切子鳴るや里祭

横浜 松川 昌義

晴天の続く蟄居や秋の暮
切りも無く舞ひ散る木の葉夕日さす
凧や裏まで掃いて仲直り
積上げし悪智恵の山崩れ築
役立つ日を夢見るファイル吊るし柿

横浜 小長谷 紘

野葡萄の瑠璃巻く籬寺の夕
霜月や茅門覆ふ苔深き
炭焼の煙の乱れ池を這ふ
砂塵飛ぶ馬の駆足冬の朝
茶の花や和太鼓聞こゆ校舎より

横浜 宮之原隆雄